「ね、ねえ、どうして！？ 私は、なぜあなたに、こんなにひどいことを、されなければいけないの？」

虚ろな表情で、まるでうわ言をつぶやくように、クレアは涙を流した。

「あなたは、どうしてそんなにも、卑劣なの？」

その言葉は、責めているというよりも、純粋に疑問に思っているようだった。

「卑劣、とな」

クレアの乳首を弄びながら、マッキンリーは呟いた。

「だって、そうじゃない。あなたの力は今、私よりも、あらゆる意味で、上回っているわ。その力をもって、あなたは私をいつも叩きのめす。なぜ？　どうしてそんなに、力を誇示したがるの？」

クレアは、はあ、はあ、と吐息をもらしながら、必死に訴えた。

「あなたが美しすぎるからですよ」

「違うわ。あなたはいつも、何かに怯えている！　あなたの、心にあるのは、一体なんなの？」

クレアの言葉は、彼女にとってはなんの意図もない、ただのその場しのぎの世間話に近いものだった。

だが、まともな人間関係を築いたことがなかったマッキンリーにとっては、初めて自分の心を揺さぶられるような、愛する人との繋がりを実感できるような、そんな言葉だった。

「聡明なクレア。愛している」

そう言って、マッキンリーは愛おしげにクレアの胸元にちゅ、とキスをし、クレアが顔をしかめた。

「だが覚えておくがいい。私ともっと繋がりたいと思うのなら、口で話さなくとも、心で私を理解するんだ」

それこそが、愛し合う夫婦の姿だ。

クレアは呆気に取られたような顔をしたあと、吐き捨てるようにつぶやいた。

「世の中には、どうあっても、理解できない種類の、人間がいると、つくづく、思い知らされるわ」

「生意気な。もっと素直になりなさい」

中に入れた指を激しく動かすと、うっ、とクレアが吐息をもらした。

「やめ、て！」

「体を温めた方が、よいかもしれないのでね。これも看病の一環です」

「バカな、ことを！」

「大丈夫です。最後まではしない」

熱が治らなければ、年若い奴隷か娼館で冷ませばいいだけのことだ。

「妊娠も、出産も、あなたの身体には毒となることは、ブレントで思い知った。あなたには、

ここで幸せに長生きしてもらうつもりなのでね！」

「ああ、あん！」

堪えきれないように、クレアがうめいた。

「神さま、どうか私に力を与えてください……！」

そう泣き叫ぶクレアの首すじに、マッキンリーはさらにキスを与え、固くそびえたった陰茎をクレアの太ももに挟み激しく動かしたのだった。